中国生まれの朝鮮族男性の進路選択過程
―日本留学経験を中心として―

市川章子（一橋大学研究員）

要旨

筆者は、これまで中国生まれの朝鮮族に対し、質的研究の分析手法である複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach:TEA）を用いて日本への定住を選択するまでに働く力を可視化することを試みてきた。

日本在住の中国生まれの朝鮮族女性を対象とした先行研究では、日本の学校が合わないことで中国に戻った朝鮮族女性が、帰国後日本語を通じていくつかの承認体験を得ることで自信を回復する過程が示された。

本研究の目的は､中国生まれの朝鮮族男性の進路選択の過程を明らかにすることである。日本在住の中国生まれの朝鮮族女性の紹介を経て、私費留学生として来日した中国生まれの朝鮮族男性に対し、4 年間にわたってインタビューを行った。分析は、ヤーン・ヴァルシナーの提唱する文化心理学に由来にする TEA を用いた。中国国内を越境し、中国から日本へ越境するなかで、故郷や韓国への思いが変化していることが明らかになった。

キーワード： 中国生まれの朝鮮族男性、複線径路等至性アプローチ、私費留学生

はじめに

本稿は、中国生まれの朝鮮族男性の進路選択過程について、半構造化インタビュー、複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach:以下TEA）（安田・サトウ 2012;安田・サトウ 2017）を用いて論じる。私費留学生[1)]として来日した中国生まれの朝鮮族男性が、中国国内を越境し、中国から日本へと越境するなかで、経験する日常のプロセスを描きだすものである。

Ⅰ．問題の所在と研究目的

朝鮮族の中国への移住は、1860 年代[2)]に始まったといわれている。高木（1990）が訳した「朝鮮族簡史」延辺人民出版社に詳しくまとめられている。1840 年の「第一次アヘン戦争」のあと、中国は次第に半植民地封建社会になった。その後、1858 年・60 年には「天津条約」「北京条約」が英国ほかと締結され牛荘（営口）が対外開放される。同時期に朝鮮も

露・米・英などの列強に圧迫され、政治も腐敗し財政は枯渇して社会秩序は乱れた。特に、1860 から 70 年の間は、北部朝鮮に大水害・干害・虫害が続き、民衆は言葉を失う状況に陥った。1860 年の北関大水害は、谷も埋まり産業施設は消滅するほどのひどいもので、農民が越境し北上した。南部満州では、19 世紀半ば以降、清朝の官史が越境者を黙認していたため、越境者の数は急増していた（高木 1990）。

1952 年に中国が吉林省の延辺朝鮮族自治州を創設し、少数民族政策をとり少数民族を優遇している。民族文化運動も盛んで、朝鮮博物館や朝鮮族美術館、図書館、朝鮮語書籍の出版社、朝鮮語の新聞、延辺では朝鮮語番組の放送もあり、民族文化に親しみやすい環境にある。集住地域では、食文化や慣習も民族性を維持しているため、子どもの時から国籍は中国だが、民族は朝鮮だというアイデンティティを有している。この地域は、朝鮮族のアイデンティティを確立しやすい環境に恵まれているが、他方、在外コリアンがいる他の地域は、朝鮮語習得が難しいケースやアイデンティティの確立について問題が出ている（李 2012）。

中国の東北地域における朝鮮族社会の「日本語ブーム」について、崔（2013）の指摘がある。近代化改革における「日本語ブーム」期では、国家のあり方を政治運動中心から経済発展中心へと転換された改革路線が実施され始め、外国語教育に課せられた重要な任務として、経済改革に資する人材の育成があった。この時期の朝鮮族社会における「日本語ブーム」は、経済発展と強く結びついており、「日本語」は、高度な経済成長を遂げた日本という「先進国」の言葉という認識を生み出した。

しかし、今日では中国の外国語教育事情は大きく変化しており、韓（2012）は 1990 年代に入ると中等教育機関における日本語学習者は急激な減少傾向にあること、延辺の外国語教育は英語を中心に進められていることに着目し調査を進めた。それによると、今では、中央の英語教育重視政策に基づき、朝鮮族たちは小学校 1 年生から英語を学ぶ機会があり、同時に漢語のピンインの勉強と英語のアルファベットの習得が進んでいる。しかし、朝鮮族の優勢を生かし高校で第 2 外国語として日本語の地位を確立することは、グローバルな人材育成に結び付き、朝鮮族の発展につながると指摘している。

中国の朝鮮族の現状について、小島（2016）は、次の傾向があることを指摘している。朝鮮族の流動化が農村の流動化に関係し、若い労働力のほとんどが出稼ぎに行く現実や、マンションの購入資金を貯めるために韓国に出稼ぎに行く予定の若い母親がいる。

最近では、中国に留まる朝鮮族のなかでも東北三省から山東省の沿岸地域への移住が増加しているとも言われている。金（2013）は、韓国に出稼ぎに行った人々が目標貯金額を達成して帰国し中国の都市部でマンションを購入する事例を報告している。

朝鮮族の日本への移動について権（2011）は、次の背景があることを指摘している。来日する朝鮮族の出生地で最も多いのは吉林省で、次に黒龍江省、遼寧省の順に多く、来日前の居住地域は東北三省と沿海都市が中心である。そして、中国における最終学歴は大学

本科が半分以上を占めており、次いで高級中学、大学院以上と高等専科・大学専科と続いている。また、高校までの民族教育歴は、8 割を超える人々が朝鮮族学校のみであり、朝鮮族学校と漢族学校を経験しているのは 2 割を切る。加えて、漢族学校のみで教育を受けているのは 2%弱であった。さらに、朝鮮族の日本への移動は、1986 年以降の現象として把握される。朝鮮族の来日メカニズムは多様であり、親族や友人がいることが第一の動機となっている。その際に、合法な移動ルートと非合法な移動ルートが存在し、知らず知らずのうちに非合法なルートを選択していることもある。

朝鮮族について金（2015）の次の指摘がある。日本に在住する朝鮮族は、留学生として来日した人が最も多い。移動する朝鮮族の人々の人生設計は多岐に渡る。国籍については、中国籍のままで過ごすこともあれば、日本や移動先の国籍に切り替えるなど様々なケースがある。

これらの先行研究をうけて、市川 (2020) は日本在住の中国生まれの朝鮮族女性に対し、半構造化インタビュー、TEA を用いて論じた。言語形成期後期に来日し日本の学校が合わないことが理由で中国に戻った中国生まれの朝鮮族女性が帰国後、日本語を通じていくつかの承認体験を得ることで自信を回復するプロセスを示した。この研究では、来日後中国語が不得手な自分に気づくことで他の朝鮮族と自己を比較し、一定の距離感を感じている様子が示された。

これに対し、本稿では、高校卒業まで中国で過ごした日本在住の中国生まれの朝鮮族男性に対し、半構造化インタビュー、TEA を用いて論じることにより、中国生まれの朝鮮族男性が中国国内を越境し、中国から日本へと越境するなかで、経験する日常のプロセスを詳細に分析する。これまでの先行研究では、両親が日本で働き、初等教育を日本で受けた朝鮮族女性を対象とした研究はあるが、両親が韓国に出稼ぎし、初等教育および中等教育までを中国で一貫して受けた朝鮮族を対象に文化心理学に由来する TEA に基づき分析を行った研究はなされてこなかった。本稿では、これまでの朝鮮族に対する先行研究に対して、「人間の発達や人生径路の多様性と複線性を描く」（安田 2012）という TEA の特徴を活かし、朝鮮族男性の詳細な質的分析を行うことで、中国生まれの朝鮮族男性がグローバル人材として人生を切り拓いていく日常のプロセスを提示できると思われる。

Ⅱ．方法

研究対象は、日本に居住する朝鮮族男性 G さんである。日本在住の中国生まれの朝鮮族女性の紹介を介し G さんに研究協力を依頼した。G さんと筆者はインタビュー開始にあたり初対面である。G さんは私費留学生として来日後、アルバイトと奨学金で生計を立てており、学生時代にアルバイト経験が多いと言う点で筆者と共通点が多く、信頼関係を築くのに時間がかからなかった。本研究は倫理的配慮に基づき研究を実施し、結果に影響の出ない範囲でプライバシー保護に配慮した。

G さんの概略

中国生まれの朝鮮族男性Gさん。現在日本で働いている。これまで何度か来日を試みたが親族の助言で断念した。来日前は中国や韓国に対して整理できない感情を抱いていたが、日本に移動後、学業や就労面で経験を重ねることで中国や韓国への感情が変化した。両親は、自営業を営んでいた。親戚の多くは農民である。両親、親戚は共に韓国へ出稼ぎ経験がある。Gさんは、日本で帰化[3]を望み、中国籍の離脱[4]を検討している。

インタビュー

インタビュー及び分析結果の図の確認は、2016 年から 2019 年にかけて行った。表 1 は、インタビューの概要である。

表 1 研究手続きとインタビュー概要

	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	第六回
日時	2016 年 3 月	2017 年 1 月	2017 年 6 月	2018 年 10 月	2018 年 10 月	2019 年 1 月
内容	対面で半構造化インタビュー	対面で半構造化インタビュー	G さんがメールで内容と TEM 図を確認し、筆者が修正を行う	G さんがメールで内容と TEM 図を確認し、筆者が修正を行う	G さんがメールで内容と TEM 図を確認し、筆者が修正を行う	G さんがメールで内容の最終確認を行う
	①来日の経緯や教育、職歴等	①前回の内容の確認と分岐点について	①これまでの内容の確認と等至点について	①これまでの内容確認と社会的助勢や社会的方向づけの位置について ②二つ目の等至点について	①父親の帰国時期について	①両親の職業や親戚の出稼ぎ経験と戸籍について

分析方法には、人間の経験を重視する TEA を採用した。本研究における TEA の概念を表 2 に示す。TEA の概念の説明は、安田・サトウ（2012）と安田・サトウ（2017）を参考に、本稿に合わせて記述した。

表 2 本研究における TEA の概念

TEA の概念	本研究における意味
等至点（EFP） 歴史的・文化的・社会的に埋め込まれた時空の制約によって辿り着くポイント[5]	EFP1：来日 EFP2：来日せず北京で働き続ける
両極化した等至点（P-EFP） EFP の対極にある点	P-EFP1：帰化後しばらく日本で勉強した後、ドイツで専門分野を学ぶ P-EFP2：アメリカ留学を経て東アジアで活躍
分岐点（BFP） 径路が発生・分岐するポイント	BFP1：瀋陽の叔父のところに行く BFP2：優柔不断な日本人上司に会社の将来を見い出せない
社会的助勢（SG） 人が歩みを進めるなかで援助になる力	SG1：父親が韓国に行く SG2：中国に戻ってきた父親との電話相談 SG3：米国に移住した知人の経験 SG4：アルバイト先で平等を実感 SG5：奨学金の支援 SG6：帰化に理解を示す両親の存在 SG7：日本の真実が見えてくる SG8：西洋の国への憧れ SG9：大学で奨学金を受ける SG10：応援してくれる彼女の存在
社会的方向づけ（SD） 人が歩みを進めるなかで阻害・抑制する力	SD1：所属感がなく苦しい SD2：父親が病気になり出費が嵩む SD3：低賃金・働き方への疑問 SD4：韓国で生きる朝鮮族の姿 SD5：文化・考えが賛同できない中国 SD6：アンダー韓国・サブ韓国という意識 SD7：法律の上にお金がある「中国」 SD8：中国社会の急激な発展

研究を進めるために社会人経験を経た看護学生の学びほぐしについて TEA を用いて研究を行った伊東（2017）の TEM 図を参考にした。考察及び結論については、ネイティブ日本語教師の海外教育経験と教師成長について TEA を用いて研究を行った北出（2017）を参考に記述した。

本研究では、G さんの心性の変容に寄り添いながら、計 6 回のやり取りを経て TEM 図を完成させた（図 1、図 2 参照）。今日の中国生まれの朝鮮族の特性を表すために、「中国の

吉林省で生まれる」から始まるプロセスと捉え、「瀋陽の叔父のところに行く」「優柔不断な日本人上司に会社の将来を見い出せない」を分岐点（Bifurcation Point:BFP）にした。始点の「中国の吉林省で生まれる」に合わせ、一つ目の等至点（Equifinality Point:EFP）は、「来日」を設定し、両極化した等至点（Polarized Equifinality Point:P-EFP）は、「来日せず北京で働き続ける」とした。さらに、Gさんとのやり取りを通してトランス・ビュー[6]を形成するなかでGさんの生き様が深く浮かび上がり、「帰化後しばらく日本で勉強した後、ドイツで専門分野を学ぶ」をセカンド等至点（Second Equifinality Point:2nd EFP）とした。両極化したセカンド等至点（Polarized Second Equifinality Point:P-2nd EFP）は「アメリカ留学を経て東アジアで活躍」である。

以下では、進路選択の変容と移動のプロセスについて４つの時期区分に沿って記述する。時期区分は、G さんの日本に対する心性の変化した時期を表している。なお、＜　＞は分析によって見出されたカテゴリーであり、「　」は実際のデータを示す。

Ⅲ．結果（１）日本への憧れと来日

第１期　憧れ

本研究の協力者であるＧさんは＜中国の吉林省で生まれる＞。物心ついた時から、中国で生まれた朝鮮族の自己について＜所属感がなく苦しい＞と考えるようになり、その思いは成長した現在でも消えることはない。その後、＜民族学校（小・中）で学ぶ＞。＜朝鮮族の高校へ進学＞すると＜父親が韓国に行く＞ことになり、続いて＜母親が韓国に出稼ぎに行く＞ことになった。高校卒業を前に、＜中国で一回目の大学受験＞を経験し、＜合格したが理想の大学ではないので進学しない＞ことを選択した。翌年、＜中国で二回目の大学受験＞をし＜合格したが理想の大学ではないので進学しない＞を選択する。この時期、＜父親が病気になり出費が嵩む＞ことが多かった。中国での大学進学をやめて＜瀋陽の叔父のところに行く＞ことにした。この時、瀋陽に行かずに両親の住む＜韓国に行く＞こともできたが、瀋陽に行くことを選んだ。瀋陽は遼寧省の省都であり中国では、朝鮮族が多く住む地域の一つとして位置付けられている。＜瀋陽の工場で叔父の仕事を手伝う＞ことになったGさんはしばらく働いたのち、＜叔父に騙されていることに気づき喧嘩になる＞。それは、叔父の経営する工場で＜低賃金・働き方への疑問＞が原因だった。叔父の工場をやめることを決心し、＜１人で北京に行き地下に住みながらいろいろな仕事を転々とする＞。地下生活[7]を続けていたある日、＜将来が見えなくなる＞こともあり韓国から＜中国に戻ってきた父親との電話相談＞をした。考えた結果、米国に行くことを考えるようになった。＜米国留学を準備＞することにし、まずはその準備段階として米国留学に関係のある仕事についた。この選択には、＜米国に移住した知人の経験＞が影響を与えた。

第２期　来日を考える

米国留学に関する仕事をやめた後、＜北京の日本留学の仕事につく＞。この頃から＜来

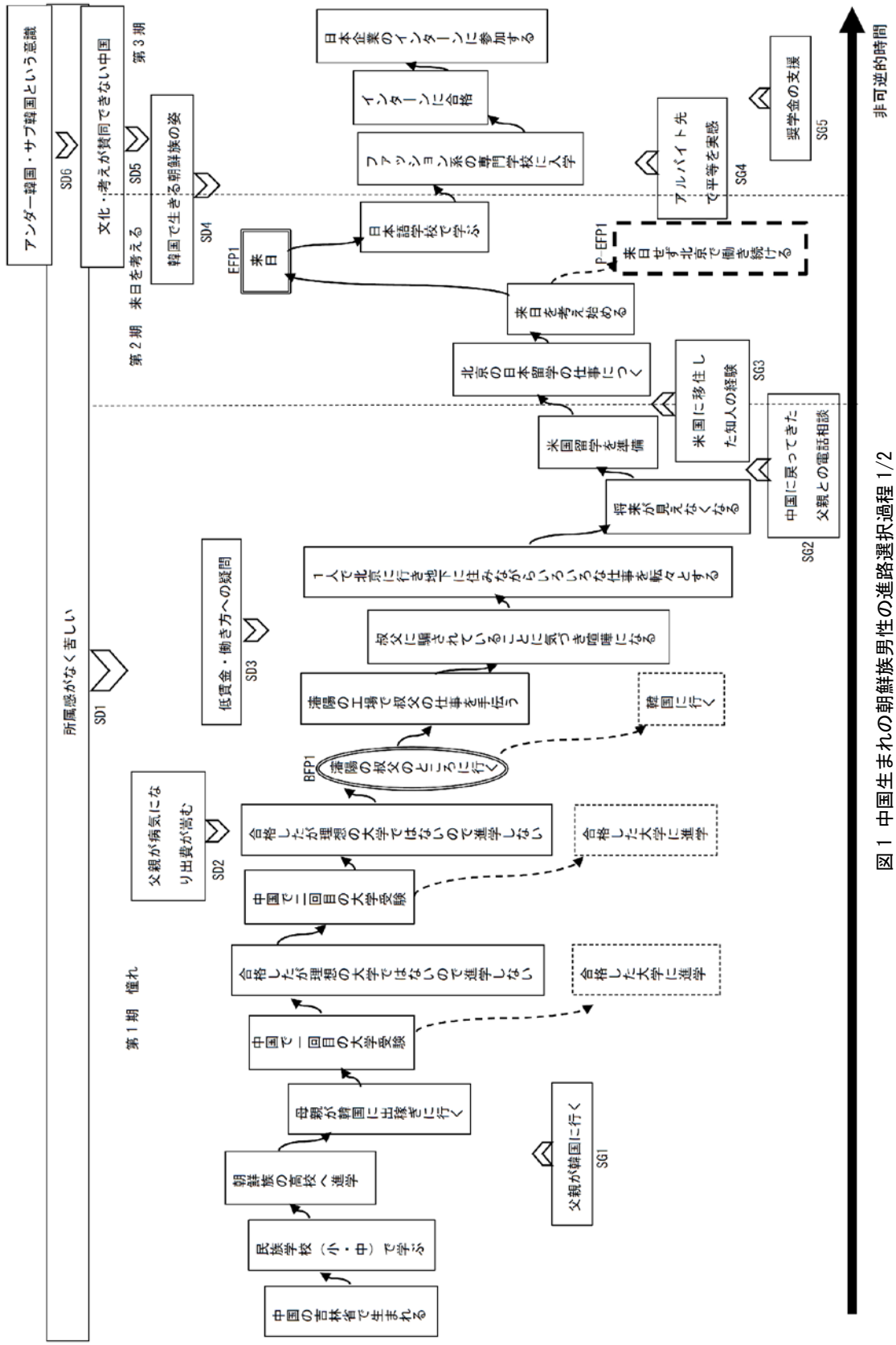

図 1　中国生まれの朝鮮族男性の進路選択過程 1/2

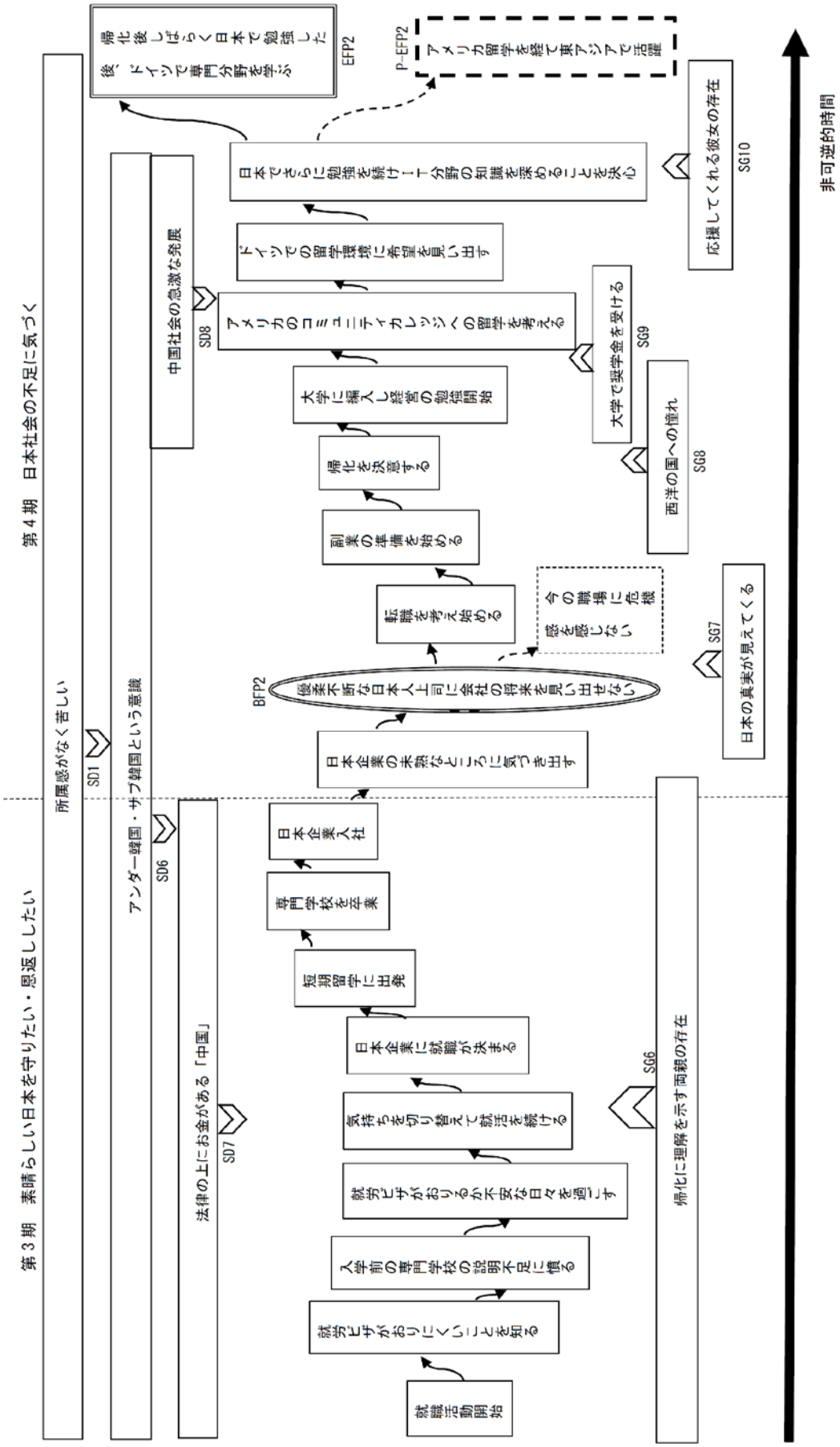

図２　中国生まれの朝鮮族男性の進路選択過程 2/2

日を考え始める＞ようになり私費留学生ビザで＜来日＞した。来日後は、＜日本語学校で学ぶ＞。日本に来てから、＜韓国で生きる朝鮮族の姿＞が気になるようになった。「韓国では空港の免税店などで働いているけれど、よい待遇ではない。中国から韓国に行った朝鮮族は冷遇されている」と思うこともあったという。そして、＜文化・考えが賛同できない中国＞という思いや＜アンダー韓国・サブ韓国という意識＞が芽生えていった。

Ⅲ．結果（２）日本の社会状況に影響を受け新しい空間を見つける

第 3 期　素晴らしい日本を守りたい・恩返ししたい

日本語学校で学んだのち、＜ファッション系の専門学校に入学＞した。来日後、様々なアルバイトをかけもちしていたＧさんは、日本人と同じ待遇で働くことができる職場環境に驚き＜アルバイト先で平等を実感＞する。専門学校では、優秀な成績をおさめ競争を勝ち抜いて条件のいい＜インターンに合格＞した。専門学校からの＜奨学金の支援＞を受けながら、＜日本企業のインターンに参加する＞。

その後、＜就職活動開始＞するとＧさんのような専門学校卒業程度の学歴をもつ私費留学生は＜就労ビザがおりにくいことを知る＞。これまで学校側からホームページや説明会で説明がなかったため＜入学前の専門学校の説明不足に憤る＞。たとえ内定をもらえても就労ビザがおりるか確定しない。＜就労ビザがおりるか不安な日々を過ごす＞。そして、＜気持ちを切り替えて就活を続ける＞と、条件のいい＜日本企業に就職が決まる＞。内定先の日本企業は、日本人学生であっても狭き門で有名な会社だった。就職活動が終わり、アルバイトで貯めたお金を資金に英語を学ぶための＜短期留学に出発＞した。帰国後、＜専門学校を卒業＞し＜日本企業入社＞に至る。

Ｇさんは、就職活動を開始した頃から、＜帰化に理解を示す両親の存在＞に支えられる一方で、＜法律の上にお金がある「中国」＞という考えがめぐるようになった。

第 4 期　日本社会の不足に気づく

しばらく経つと徐々に現実が見えていき就職先の＜日本企業の未熟なところに気づき出す＞。会社内の意思決定が遅いことや同僚や上司の働き方に疑問を持つようになっていく。Ｇさんの勤める会社では、仕事で必要とされる言葉は日本語である。来日前から朝鮮族の学校で日本語を学んできたＧさんは、会議やミーティングでの日本人社員の振る舞いにも違和感を覚えるようになり＜優柔不断な日本人上司に会社の将来を見い出せない＞と、＜転職を考え始める＞。この時期になると、学生時代に比べて＜日本の真実が見えてくる＞ようになった。

先輩社員にモデルとなるような人物がいないこと、給料水準が低い現実を冷静に見つめ「会社を今すぐにでも辞めたい」と考えるようになる。将来に備えて＜副業の準備を始める＞ことにした。Ｇさんは自分の将来を考えた際に＜帰化を決意する＞。来日前は、情報収集の面で制約があったが、日本に住むことによってこれまで接触できなかった情報にア

クセスできるようになった。結果、＜西洋の国への憧れ＞も強くなり、働きながら＜大学に編入し経営の勉強開始＞する。＜中国社会の急激な発展＞に戸惑いながら、編入先の＜大学で奨学金を受ける＞サポートがあり、＜アメリカのコミュニティカレッジへの留学を考える＞ようになった。現地の先生やオフィスに連絡をとるうちに、アメリカ留学は費用が嵩むことを知る。G さんが学びたい IT 分野はドイツで留学生を好条件で募集していることを知り＜ドイツでの留学環境に希望を見い出す＞。

＜応援してくれる彼女の存在＞もあり、すぐに留学せずに＜日本でさらに勉強を続け IT 分野の知識を深めることを決心＞した。そして、＜帰化後しばらく日本で勉強した後、ドイツで専門分野を学ぶ＞に至る。

以上が研究を通じて明らかになった。来日直後は、中国や韓国へ複雑な感情を抱いていた G さんだったが、日本社会で経済的に自立をして学業に励み、学歴を獲得していくうちに、かつては「中国に戻りたくない」と語っていた心理が変化する。就職し、社会人学生として大学に編入後は「中国に仕事で行ってもいい」と語りが変化し、韓国に対しては以前のように否定的な感情を口にすることは少なくなっていった。

Ⅳ．考察　朝鮮族男性の進路選択と日本留学から見えてくるもの

考察では、G さんがセカンド等至点（2nd EFP）に至るまでに働いた諸力である社会的助勢（SG）と社会的方向づけ（SD）に着目する。その後、崔（2013）に学びながら、G さんの事例が日本語をどのように位置づけているのかを考察する。

TEA における SG は、人が非可逆的時間を生きる中で援助的に働く力である。SD は、人が非可逆的時間を生きる中で抑制的に働く力である。表 2 を参照すると、来日前は家族に関する SG と SD がそれぞれ捉えられていた。両親が韓国に出稼ぎにでかけ、G さんが 1 人瀋陽で暮らしていた時期には、労働に関する SD が捉えられている。身内である叔父に搾取されていることに気づき、帰国した父親に将来の相談をした時期には、父親の助言に加え、米国に移住し新しい生活を始めた知人が援助的に働く力となっている。来日を境に、韓国で生きる朝鮮族の姿や中国や韓国に対する感情が抑制的に働く力として湧き上がっている背景には、来日後様々な情報に触れるなかで G さんが自己と中国や韓国で生きる人々との比較をしていることが考えられる。

そして、日本企業に就職後、学生の立場では見えなかった日本の真実に触れるようになり、先進国である西洋の国への憧れや奨学金の支援、恋人の存在などが支えとなり、時折中国社会の急激な発展に心を動かされながらも、世界で最先端の専門分野を学べるドイツ行きを志すに辿り着いている。

G さんは約 4 年に渡って研究に参加してもらった。最後のインタビューが終わってもなお、「所属感がなく苦しい」という思いはなくなることはなく、社会的方向づけとして TEM 図に描かれている。しかし、朝鮮語も中国語も日本語も英語も習得し力強く生きる G さん

の姿には、東アジアを行き来してビジネスを展開したいという思いが満ち溢れていた。

近代化以降の朝鮮族の日本語認識について考察した崔（2013）は、朝鮮族の「日本語ブーム」は、経済発展と深い結びつきがあると指摘する。G さんの事例からは、越境を重ね、経済的に自立し、高い学歴を獲得するための手段としての日本語という認識が示唆された。

おわりに

本稿では、中国生まれの朝鮮族男性の進路選択過程について、日本留学経験を中心に半構造化インタビュー、TEA を用いて論じた。来日前は、血縁や少数民族という条件下で行動や選択について様々な影響を受けていた G さんが、日本への移動を契機に主体的な人生の選択にシフトしている様が示唆された。

注

1）私費留学生とは、（出入国管理及び難民認定法の別表第 1 に定める「留学」の在留資格を有する者）を対象とし、国費外国人留学生、外国政府が派遣する政府派遣留学生及び在籍期間が 1 年未満の交換留学生・短期留学生は対象に含まない（日本学生支援機構 2019）。

2）1860 年代初頭の頃には、朝鮮半島と隣接している沿海州の旧ソ連に朝鮮人が住み着いたと言われている。当時は、国境線も大雑把で緩やかなものだったので、貧しい農民たちは、土地を求めて凍りついた豆満江をひそかに渡り、人のいない不毛の地を耕して住み着くようになった。彼らのほとんどは、朝鮮の辺境地域である「六鎮」の出身者で、このことは旧ソ連の独特な高麗人言語共同体の形成に影響を与えた（イ 1998）。

3）法務省の「帰化申請」によると、日本に帰化しようとする外国人であれば随意申請できる。記載例では、韓国籍を有する、大韓民国と日本に生まれた二つの申請事例を紹介している（法務省「帰化許可申請」参照）。

4）国籍離脱について中華人民共和国国籍法の定めを説明する。中華人民共和国国籍法は、1980 年 9 月の全国人民代表常務委員会委員長によって、第八号令として公式に知らされた。二重国籍の禁止について第三条で禁止している。自己の意思によって外国籍を取得した場合には、自動的に中国国籍を喪失する。国籍の回復については、第十六条で触れており、中国公安部の審査によって国籍回復の審査を受けることができる（中国公安部 1980）。

5）TEA では、非可逆的な時間の流れのなかで生きる人の行動や選択の径路は、複数存在すると考えられる。どこまでも自由に選択・行動ができ、末広がり的に径路が存在するというのではなく、歴史的・文化的・社会的に埋め込まれた時空の制約によって、ある定常状態に等しく（Equi）辿りつく（final）ポイントがあり、それが等至点（EFP）である（安田 2012）。

6）トランス・ビューとは、TEA の手続きの一つである。インタビューは「意味のある会話」と定義されることがある。トランス・ビューは、見方（view）の融合（trans）という意味を表し、視点・観点の融合を意味する（サトウ 2012）。

7）地下生活については、蟻族、かたつむり族、ネズミ族の三つの名称が存在する。賀照田らの論考によると、蟻族とは、2000 年以降に出現した良い職業や高収入が得られず両親の金銭的サポートもあまり得られない大学卒業生のグループを指す。かたつむり族は、住宅価格の高騰した社会状況のなかで、ホワイトカラー（≒中産階級）という過去の理解が打ち砕かれた現実を表す（賀照田 2014)。ネズミ族とは、2008 年前後地下生活者が増加し、不動産の高騰により地上に家を借りることができない地方出身の低所得者層が本来居住用ではない地下の狭い部屋に住み、その様子が地下に巣を作って暮らすネズミに例えられて「鼠民」と呼ばれる（日経ビジネス 2016)。

参考文献

市川章子（2020)、「中国生まれの朝鮮族女性が日本定住を選択するまで―言語形成期後期に来日し帰国した事例から」『対人援助学研究』vol.9、「印刷中」。

伊東美智子（2017)、「第 1 節 社会人経験を経た看護学生の学びほぐし」（安田裕子・サトウタツヤ『TEM でひろがる社会実装―ライフの充実を支援する』誠信書房）69-88 頁。

イ・ヨンスク（1998)、「第 8 章 中央アジアの朝鮮民族」（広瀬崇子『イスラーム諸国の民主化と民族問題』未來社)、301-323 頁。

延辺人民出版社（刊）高木桂蔵（訳）(1990)、『抗日朝鮮義勇軍の真相―忘れられたもうひとつの満州』(原著『朝鮮族簡史』1986 年発行）新人物往来社。

韓秀蘭（2012)、「中国延辺朝鮮族の中等教育における日本語教育の展望」『人文論叢』29、175-183 頁。

賀照田（著）河村昌子（訳）(2014)、「第八章 中産階級の夢の浮沈と中国の未来―近年のネット流行語から見る中国知識青年の経済的・社会心理的境遇」（鈴木将久『中国が世界に深く入りはじめたとき 思想からみた現代中国』青土社)、241-256 頁。

北出慶子 (2017)、「第 2 節 ネイティブ日本語教師の海外教育経験は教師成長をうながすのか」(安田裕子・サトウタツヤ『TEM でひろがる社会実装―ライフの充実を支援する』誠信書房)、48-68 頁。

金銀実（2013)、「急激な社会変動に翻弄される中国朝鮮族―韓国出稼ぎ経験のある農民夫婦からの聞き取り」『日本アジア研究』10 巻、157－172 頁。

金花芬（2015)、「在日本朝鮮族の教育戦略―家庭内使用言語と学校選択を中心に」『人間社会学研究集録』10、49-70 頁。

権香淑（2011)、『移動する朝鮮族―エスニック・マイノリティの自己統治』彩流社。

小島泰雄（2016)、「延吉農村における朝鮮族の移動性と農地の流動化」『地域と環境』No.14、25－35 頁。

サトウタツヤ（2012)、「第 2 節質的研究をする私になる」（安田裕子・サトウタツヤ『TEM でわかる人生の径路―質的研究の新展開』誠信書房）4－11 頁。

崔学松（2013)、『中国における国民統合と外来言語文化―建国以降の朝鮮族社会を中心に』創土社。

安田裕子（2012)、「第 1 節 これだけは理解しよう、超基礎概念」（安田裕子・サトウタツヤ『TEM でわかる人生の径路―質的研究の新展開』誠信書房）2-3 頁。

安田裕子・サトウタツヤ（2012)、『TEM でわかる人生の径路―質的研究の新展開』誠信書房。
安田裕子・サトウタツヤ（2017)、『TEM でひろがる社会実装―ライフの充実を支援する』誠信書房。
李裕淑（2012)、「第 10 章 世界に暮らすコリアン」（小倉紀蔵『現代韓国を学ぶ』有斐閣選書)、291-325 頁。
中华人民共和国公安部　中华人民共和国国籍法（全国人民代表大会常务委员会委员长令第 8 号）（1980 年 9 月 10 日）＜http://www.mps.gov.cn/n2254314/n2254409/n2254410/n2254413/c3930378/content.html＞（2019 年 1 月 8 日）
独立行政法人日本学生支援機構（2019）平成 31 年 1 月公表「平成 29 年度私費外国人留学生生活実態調査概要」＜https://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/h29.html＞（2020 年 4 月 1 日）
日経ビジネス（2016 年 6 月 9 日）
＜https://business.nikkeibp.co.jp/atcl/report/15/258513/060800030/＞（2019 年 1 月 6 日）
法務省（作成日不明）帰化許可申請
＜http://www.moj.go.jp/ONLINE/NATIONALITY/6-2.html＞（2019 年 1 月 8 日）

This work was supported by the Core University Program for Korean Studies through the Ministry of Education of the Republic of Korea and Korean Studies Promotion Service of the Academy of Korean Studies （AKS-2016-OLU-2250001）.

A Process of Shaping Career: The Case of a Chinese-Born Korean Man Having Study-abroad Experience in Japan

ICHIKAWA, Akiko

Abstract

The author have been attempting to visualize the factors which seem to have impacts on Chinese-born Korean people's decision to move to Japan through studying them employing Trajectory Equifinality Approach/TEA, which is a qualitative method.

Previous studies which investigate Chinese-born Korean Women living in Japan show the process that Chinese-born Korean Women, who went back to China because they could not adapt themselves to Japanese educational circumstances, recovers their self-esteem by having experience of being accepted through using Japanese.

The purpose of this study is to clarify a Chinese-born Korean man's process of forming future career plan. The author has interviewed, a Chinese-born Korean man, who came to Japan as a privately financed international student, for four years. Collected data was analyzed with Trajectory Equifinality Approach/TEA, which derives from Cultural psychology posited by Dr. Jaan Valsiner.

The result in this research shows that the subject’s emotional attitude toward his hometown and Korea has been changing through moving in China and from China to Japan.

Keywords： Chinese-born Korean Man, TEA, Privately financed international student